

韓国の「風水」の実践は、一般的にそれ自体が反環境主義的で、人間中心であるとされている。しかしながら、韓国の風水の理論と実践は、大地に敬意を表し、その上に生きる全ての生き物との調和を保つひとつの方法であり、人間中心的な利用価値を促進することによって大地を破壊するものではない。本稿では、私は韓国の風水理論を異なる角度から概観し、それが環境に十分に配慮した韓国の伝統的思想であるということを示したい。それを行うにあたり、私は韓国の風水(*poongsoo*)が、中国の風水(*fengshui*)とは異なるものとして考える。特に、三国時代後期から韓国王朝時代にかけて道誥(Dosun)という韓国仏教の僧侶によって始められた裨補風水(*bibo/complementary poongsoo*)という韓国独特の風水に注目する。伝統的な韓国風水が、環境主義的な世界観であることの証拠に、風水理論が、西洋側において環境に配慮した立場を明確にしているディープエコロジーと共有している重要な特徴を明らかにしたい。

風水において運が良いとされる条件を満たした「明堂(*myeungdang*)」の土壌が、この世の幸運や幸福を人間にもたらしてくれるという風水の仮説を受け入れるなら、風水の思想は反エコロジカルで、反社会的であると言える。しかし、「明堂」という言葉は絶対的ではなく、相対的な概念である。なぜなら、「氣(*gi*)」それ自体が、相対的な概念だからである。換言すれば、ある地における氣は、ある特定の人間には反応しても、他の人間には反応しないかもしれないからである。風水学者である韓国のチョイ・チャンジョ(Chang-Jo Choi)は、風水において重要なのは、土地の良し悪しなのではなく、その人に適合した土地かどうかののだと言う(『大地の涙、大地の希望(*Tears of the Earth, Hope of the Earth*)』16)。完璧な明堂というものはない。風水の条件という点から言えば、どんな場所にも短所や長所はある。ある人間にとって吉兆の場所は、他の人間にとっては不吉な場所になるのである。

さらに、韓国の風水の特徴として、裨補の思想を有しているという点がある。裨補とは、弱い場所と、「厭勝」という強い氣のこもった抑圧的な場所を相補うことにより、人間が意図的に土地を管理することである。韓国の風水には、完璧な明堂というものはないという「風水無全美」を前提としており、したがって、人間の自然への介入を認めていると考えられる。人間が仲介者となって、土地のバランスを保ち、管理するのである。

それでは、東アジアの形而上学において、裨補とはいかなる理論的根拠をもっているのか。東アジアの人々にとって、自然は完結した存在ではなく、終わりなき存在の変化のプロセスである。人間もまた、自然との相互作用を通して変化の状態にある。この考え方によると、人間は自然の生成や変化へ積極的に参加するということになる。チョイ・ウォンサク(Won-Suk Choi)は、この思想を、新教的用語を遣い、「人間と大地の協力的相補(地人相補)」(73)と説明している。チョイは、自然が人間に影響するのと同じく、自然に人間中心的な変容を与えることで、人間は自然を相補、あるいは管理する権利があると言う。『変容の書(*The Book of Change*)』によると、「王は、タオ(*tao*)を切ることによって成就し、適切さを高めることによって、民を治める(后以 財成天地之道 補相天地之宜 以左右民)」とあり、注釈者である朱子(Jooja)は、この言葉を、「タオを切って成就するとは、過剰なものを制する(財成以制其過)を意味し、適切さを高めるとは、不足を補う(補相以補其不及)を意味する」と解釈している(チョイから再引用 73)。この古典的な注釈は、まさに人間が弱くて不十分な土地を補い、氣が過剰に強くなっている場所を管理するという裨補の思想を適切に弁明している。

ネス(Naess)はディープエコロジーに8つのカテゴリーを提案している。これらの8つのポイントは、究極的には韓国の風水と同じ路線であることが認められるので、ここでこれらと比較してみたいと思う。

ネスの1, 2, 3のポイントをまとめると、非有機的な生物をも含む人間以外の生物体はそれ自体の価値を持っているのであり、人間はこの事実を認め、それらのエコロジカルな豊かさや多様性を損なったり減じたりすべきではないということである。ナエスが、人間以外の生物に見出すこの本来備わっている価値というものは、風水の氣に関する仮説とまさしく共通している。チョイ・チャンジョも指摘するように、氣は、風水理論を支える基本的概念である(『土地の論理、人間の論理』221)。氣の存在の前提となるものは、人間以外の全てのものは有機体として生存しており、それは人間以外の存在それぞれに価値ある生命が備わっているということの意味するということである。したがって、人間は、山、川、樹木にせよ、兎やねずみにせよ、人間以外の生き物と対峙するときには、注意を深くすべきである。風水には、「土地を扱うときには、狐がこのうえなく注意深く歩くように、最大の注意を払わなくてはならない」という古い教えの言葉がある(チョイ『土地の論理』229)。人間は自然のありようを妨げることなく、自然に順応しなくてはならないということが、風水の本質となる教えのひとつである。

ナエスの4, 5, 6, と8のポイントは、人間の積極的な活動に関わっているが、おそらくこれが反エコロジカルな文化を描きなおすことになるだろう。ディープエコロジーは、我々の環境的に後退した社会を環境に配慮した世界へ変えるべく人間の積極的な働きを呼びかけている。ディープエコロジストたちは、人間は自然に順応すべきだと唱えているが、一方で、人間だけがエコロジカルな問題を引き起こすのだから、人間だけが環境が破壊された世界を変えるために意図的な努力をすべきであって、また、することができると認めている。よって、ディープエコロジストたちは、社会に様々な組織的変化を起こす

ような多様な活動に積極的に参加しているのである。

ある意味において、韓国の風水、特に裨補風水は、意図的な変化を起すことについてはディープエコロジーより積極的である。韓国には、裨補の影響を受けた場所が数え切れないほど存在する。具体的には、裨補森林や樹木、人工池、石塔、石碑、仏陀図などであるが、韓国の風水文化がいかに生物界の補完や管理に人為的かつ積極的な介入を認めているかをよく示した例は他にいくつもある。しかし、裨補風水は、裨補を実践するにあたって、エコロジーが破壊されることを許さない。人間が不十分な場所を補完したり、強すぎる気を抑制したりする時に、山や森林が壊されたり、危機にさらされるということはない。人間は樹木や岩石などの自然の要素を利用するのである。というわけで、韓国の風水文化は環境主義的であると言える。それは様々な政策変換や、経済的・技術的統制などの構造的変容を起させるばかりでなく、人間と自然の調和へ向けて、裨補補完や裨補管理などに見られる人間の十分な介入を積極的に起させる。

チョイ・チャンジヨが指摘するように、前述の「同気環應 (Gi Correspondence)」の原則と共に、「錦囊經 (Guemnanggyeung)」は、先祖が死後子孫を守るという最も支配的な信仰を生む。その場所の氣で満たされた先祖の骨が、その子孫の氣を強めるということを示唆しているのである。そして、運の良い氣を通して、子孫はこの世における力や財といったものを与えられる (チョイ『大地の涙』325)。同気環應の原則に支配されるのは人間だけでなく、人間以外の他の生物もまた氣の影響を受けている。これは「山が崩れると鐘は鳴り、栗が春になって外で花を咲かせると、部屋の栗は芽吹く」という逸話にも暗示されている。しかし、チョイは、19 世紀の韓国の実用主義派であるホン・ダエヨン、リー・イク、ジェガ・パークなどの様々な反論を例にして、こうした思想を問題視する。例えば、リー・イクは、「外にある栗の根や枝を残らず破壊したら、部屋の栗は春に芽吹かないのだろうか」と言った。パークも「水葬や火葬、鳥葬 (鳥に死体を食べさせる方法)、そして木葬 (木の枝の上で死体を徐々に腐食させていく方法) という文化をもった国にさえ、王や側近、平民たちはいる」と言い、この考えを嘲っている。(チョイ・チャンジヨ『大地の涙』から再引用 327-28)。

ナエスの 7 つめのポイントは本質的な生命観についてである。それは、大きさ (bigness) と偉大さ (greatness) を区別し、後者のほうにより共感している。ディープエコロジストの「自己実現」の仮説もまた、人間と自然が相互関係した運命を強調している。ディープエコロジストのリーダーであるビル・デヴァルが「ディープエコロジーは、人と共同体、そして自然の全ての間にある新しいバランスと調和を発展させる方法として登場した」と言うように、韓国風水も、人間と自然の平和的調和を志向している。真の意味において、明堂は、人間中心の文化ではなく、自然のありように従うべく非人間中心的実践である。このように、真の風水は生命の「偉大さ」を高めていくものであると言ってよい。

もちろん、埋葬の風水には人間中心的で環境破壊的な側面もある。しかし、こうした風水の人間中心的なやり方は、韓国風水の真意を歪めたものである。埋葬の風水は儒教思想の影響を受けているので、それはおそらくよい埋葬場所を求めることによって、両親の死後も、子としての孝行心を満たそうとしているのだろう。埋葬の風水を実践する真の目的は、子孫の幸福にあるのではなく、子孫の親孝行という務めを果たすことにある。また、埋葬の風水や住居の風水では、基本的な世界観は人間と自然の平和な調和を求めることにある。西洋人が自分たちの利便のためにエコシステムを壊し、BODやCODについての科学的な知識に示されるような科学技術だけに頼って環境問題に対処しようとしている一方、東アジアは、人間の欲望と自然の摂理を調和させることによって、環境破壊を最小限に抑えようとしている。すなわち、西洋では、破壊した後で被害を受けた環境を蘇らせようとしているが、東洋は環境破壊の根本的な原因に抵抗しているのである。調和を保つ方法とは、あたかも自然が重要であるといったようにふるまうことである。冬暖かく、夏涼しい明堂は、まさに人間のエネルギー消費を最小限に抑えることができる地点である。ディープエコロジーと同様、風水も、人間以外の世界への人間の介入を最小限に抑えるように唱えている。裨補を実践することにより、韓国風水は不十分な地点を積極的に補う。また、韓国風水学は、「経済、技術、そしてイデオロギーの基本的な構造」に影響する様々な政策を打ち出していきまさにその段階で真剣に認識されるべき思想である。